



JIC インフォメーション

第 190 号 2017 年 1 月 10 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

ロシア
旧ソ連
国際交流誌



あけましておめでとうございます
ジェーアイシー
本年も JIC をよろしくお願ひします!!

С НОВЫМ 2017-ЫМ ГОДОМ!!



日口新時代を切り開こう

<http://www.jic-web.co.jp>

《プーチン大統領訪日》

日口新時代へ、日口首脳会談を振り返る…伏田昌義…2P
日口・イベント報告…日口フォーラム、ビジネス対話…3P
日露平和条約は達成されるのか…A・コーシキン…6P

ソロヴェツキー諸島訪問(2) …モロゾフ・デニス…8P
サハ共和国、鉦山の町ミールヌイ…金井義彦…12P
《JIC スタッフより新年ご挨拶》
テーマは「2017 年の夢」……………14P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

特集・プーチン大統領訪日

12 月 15 日、16 日、プーチン大統領がロシアの元首として 11 年ぶりに日本を公式訪問し、安倍首相と山口県長門市および東京で首脳会談を行った。首脳会談の成果と課題を振り返る。(伏田昌義)

日口新時代を展望する



北方四島での共同経済活動と日口経済協力で進展

プーチン訪日前には「今度こそ北方領土問題で何らかの進展があるのではないか」という期待が日本国内で高まっていた。しかし、首脳会談の後、当初予定されていた共同声明は発表されず、「北方 4 島(南クリール)における共同経済活動について」のプレス向け声明が発表された。

他方、プーチン大統領には約 350 人の経済人・政府関係者が同行して、東京で「日露ビジネス対話」を開催し、日口両政府と企業・団体間で 82 件の経済協力に関する合意文書(日本側の投資総額約 3000 億円)が締結された。協力案件は、インフラ整備、農業、医療、住宅といった生活関連分野に及び、これまでもっぱらエネルギーと自動車関連に偏っていた経済協力の裾野が大幅に広がった。

また、2018 年が「日本におけるロシア年」「ロシアにおける日本年」と決められ、大規模な文化交流事業が行われることが決まった。ウクライナ問題をめぐる対露制裁で中断していた外務・防衛担当閣僚会合(通称「2 プラス 2」)も再開される見通しとなった。新聞等では報道されなかったが、ロシア人の訪日観光ビザの発給要件もこの 1 月 1 日から大幅に緩和されることになった。

「領土で進展なし」、でも首脳会談は成功だった！

新聞やマスコミの一部では、「北方領土問題では『ゼロ回答』だった」、「経済協力の『食い逃げ』だ」、「国民はがっかりしている」と否定的な評価がなされ、また民進党など野党からも「全く成果がなかった」と批判の声があがっているが、大局的に見て今回の日露首脳会談は日本にとって成功であったし、平和条約交渉を前に進める大きな一歩となったと筆者は考える。

まず、領土問題を含む平和条約交渉は、1997 年 11 月の「クラスノヤルスク合意」(橋本首相・エリツィン大統領)から 2001 年「イルクーツク声明」(森首相・プーチン大統領)まで、日本側が『四島一括返還』にこだわらない柔軟な姿勢を見せて、「歯舞・色丹の引き渡し条件」と「国後・択捉の帰属問

題」を分けて話し合う「同時並行協議」を行うというところまで合意が進んだが、これが「2 島返還論だ、けしからん！」と日本国内の親米保守派から猛烈な攻撃を受けて、交渉にあたった鈴木宗男衆議院議員や東郷和彦欧亜局長、佐藤優外務省分析官らが失脚させられ、2002 年に頓挫してしまった(いわゆる「ムネオ疑惑」)。その後約 10 年間、日口関係は再び冷え切ってしまった。せっかく積み上げた交渉が日本側の事情で一方的に中断してしまったのだから、これを修復するためにはまず日本側から第一歩を踏み出さなければならない。

平和条約交渉に意欲を燃やす安倍首相のもとで 2013 年から日口関係が好転の兆しを見せたところで、14 年にウクライナ問題で日本が対口制裁に加わったために、関係はまた逆戻り。今回の日露首脳会談は 15 年間中断していた平和条約交渉を再び前に動かすために、まずはその環境整備を進めるものだったのだ。その意味で、四島での共同経済活動と 82 件もの経済協力案件の合意は、日口関係を再起動させる大きな成果だったと言える。

実際、今回の首脳会談にむけた安倍官邸の決意は並々ならぬもので、関係省庁を通じて各業界に「何としても協力案件を積み上げろ」と強力な指示が出されていた。旅行業界でも JATA(日本旅行業協会)主催で急遽 11 月に視察団が生まれ、ロシア極東への観光客増をはかることになった(24 頁参照)。

もちろん経済協力は本来ウィンウィンの関係が基本であって、日本がロシアに一方的に利益を与えるものではない。一方的に有利(不利)な案件はそもそも成立しないし、その意味で「食い逃げ」批判は的外れである。

日本は対露制裁から事実上離脱した

今回の首脳会談で、経済協力案件だけでなく、「2 プラス 2」の再開、ビザ要件大幅緩和がこっそりと目立たない形で決定されたことも見逃せない。日本外務省は、ウクライナ問題をめぐる対露制裁の一環として、これらの協議を中断して

いた。つまり、日本側はこれによって対露制裁から事実上離脱する方向に進んだのである。

日本の『制裁破り』に対する G7 諸国とりわけアメリカからのリアクションは今後当然予想される。60 年前の日ソ国交回復交渉で、日本側が歯舞・色丹の「2 島引き渡し」で手を打とうとした時に、アメリカのダレス国務長官が「それなら、沖縄は返さないぞ」と重光外相を強烈に恫喝して、平和条約が結ばなくなり共同宣言にせざるをえなかった事実は有名な話だ(6 頁、コーシキン氏インタビュー参照)。北方領土交渉は、米ソ冷戦下で、アメリカの軍事戦略とも密接にからんで翻弄され続けてきた。アメリカのトランプ新大統領がロシアに対して今後どのような態度をとるかは未知数だが、日ロ交渉を進める上で、軍事同盟関係にあるアメリカとの調整は不可欠だ。

交渉のカギ握る 4 島の非軍事化

その点で、今回の首脳会談で共同宣言や共同声明が出せなかった決定的な要因として、「北方領土の非軍事化」の問題があることを忘れてはならない。

プーチン訪日をめぐる新聞報道を追うと、11 月初め頃までは「領土交渉で何らかの進展がある」と日本側の期待が高まっていたのだが、11 月 19 日のペルー・リマでの首脳会談を境に『急減速』し、ロシア側の硬い対応とともに楽観論が吹き飛んだことが読み取れる。11 月上旬モスクワでの日ロ交渉で、日本側が北方領土が返還された場合日米安保条約を適用して米軍基地を置く可能性があるかと無神経にも答えたのが、ロシア側硬化の原因だとされる。

これは立場を入れ替えてみればロシア側の恐れと怒りがよくわかる。中国が日本に「尖閣列島を返してよ。そしたら整備して立派な軍事基地を作らからさ」と言ったとしたら、日本人は喜ぶだろうか。怒り狂うに違いない。

プーチン大統領は、16 日の記者会見で日米安保条約に敢えて触れ、ロシア海軍の活動が制約されることに懸念を表明した。

日ロ新時代をともに切り開こう

今回の首脳会談で、平和条約交渉は『再起動』された。次は共同経済活動をどのような条件で進めるか、それ一つとっても難しい交渉が待っているが、経済交流、文化交流、人的交流を積み上げ拡大しつつ、着実に交渉環境を整え、一致点を拡大していくことが望まれる。安倍首相は早くも今年早い時期にロシアを訪問して共同経済活動を具体化させる決意を表明している。

私たちは日ロ交渉を直接担えるわけではないが、とりわけ人的交流、観光交流の拡大で、日ロ新時代をともに切り開く一翼を担っていきたいと考える。

(記;2017 年 1 月 5 日)

日露関係イベント報告

プーチン大統領の訪日前後には、日本国内で様々な日ロ関係イベントが行われました。その中には JIC 主催のロシアセミナー(11 月 19 日)もあったわけですが、以下、日ロ協会の活動などを中心に、JIC が参加したイベントを報告します。

【10 月 17 日】

日ロ国交回復 60 周年記念・日ロフォーラム

日ロ交渉『仕切り直し』印象づける

10 月 17 日、東京にて、日ロ国交回復 60 周年記念行事および日ロフォーラムが、NPO 法人日本ロシア協会と駐日ロシア大使館の共催で開催されました(後援;日ロ友好議員連盟、経団連、日本外務省など)。

記念行事は、第 1 部=鳩山一郎銅像献花式(於:鳩山会館)、第 2 部=日ロフォーラム(於:ロシア大使館)、第 3 部=記念祝賀会(同)と 3 部に分かれ、総勢 200 名以上が参集しました。



フォーラムには、安倍晋三首相と岸田文雄外相からメッセージが届けられ、主催者を代表してアフアナシェフ大使と高村正彦日ロ協会会長が挨拶。高村氏は『対露 8 項目提案』をとりあげ、「日ロ貿易の規模は日中貿易の 20 分の 1、日韓の 6 分の 1、観光交流にいたっては日中、日韓の 30 分の 1 である。官民一体となって日ロ交流の拡大に取り組まなければならない」と強調しました。

「これからの 60 年~日ロ新時代の展望」と題したパネルディスカッションでは、東郷和彦・元外務省欧亜局長(現京都産業大学教授)とアレクサンドル・パノフ元駐日ロシア大使(現モスクワ国際関係大学教授)が基調講演したあと、日本側 10 名ロシア側 5 名のパネリストが、『8 項目提案』の内容に即して経済協力、国際政治、極東交流、文化外交など、専門的な立場から意見交換を行いました。1 時間半の短時間に 15 名が 1 人 5 分の持ち時間で次々と発言していくと

いう凄まじい企画で、パネリストの方々には気の毒ではありましたが、今度こそ日ロ関係を前向きに拡大していこうという熱気に溢れたフォーラムとなりました。

また、記念祝賀会では、国交回復 60 周年に際し両国関係の改善に貢献したことを評価して、森喜朗元首相、鳩山由紀夫元首相、鈴木宗男元衆議院議員、東郷和彦京都産業大学教授ら 11 人に、ロシア日本協会を代表してパノフ元大使から感謝状が贈られました。

プーチン大統領の 12 月訪日を 2 カ月後に控え、日ロフォーラムは、日本側が「北方領土問題」に関して、かつての『四島一括返還』の旗を完全に降ろし、15 年前に鈴木宗男議員やパノフ大使、東郷外務省欧亜局長らが推進した『二島先行返還』ないし『並行協議』に立ち返って、日ロ交渉の仕切り直しを行うことを強かにアピールするものとなりました。(しかしその後、プーチン大統領来日までの経過を見ると、「仕切り直し」たからと言ってすぐにこの 15 年間をリセットできるわけではなく、日ロの信頼関係を修復し領土交渉の環境を整えるのにはさらに多くの時間を要することが明らかになったようです)。

【12 月 16 日】

日露ビジネス対話～分科会と全体会

「対露 8 項目提案」具体化を推進

プーチン大統領を東京に迎えた 12 月 16 日には、午前には都内のホテルで「日露ビジネス対話」の分科会、午後には経団連会館で両首脳参加による全体会合が開催されました。これに合わせて、両国の政府間で 12 件、企業・団体間で 68 件の合意文書が締結されました。

午前中の分科会では、両国のビジネス関係者が「8 項目協力提案」に沿った 8 つの分科会に分かれて意見交換を行いました(主催は、経団連、ロシア NIS 貿易会、露日ビジネスカウンスル、ロシア産業家企業家同盟など)。「ポストーク通信」によれば、日ロ合わせて約 900 人の企業・団体・政府関係者が参加したとのこと。

JIC からは第 2 分科会「人的交流拡大における協力」に参加しました。日本側から東海大学、東北大学、新潟大学、北海道庁など、ロシア側からはサハ共和国、識字ソフト会社 ABBYY、在日ロシア人ビジネス評議会などの代表が、それぞれ交流の現状と成果などを報告し合いました。

分科会で人的交流の広範な裾野を形成する観光交流については残念ながら報告がありませんでしたが、首脳会談を機に日本外務省がロシア人の日本滞在ビザの発給要件緩和を発表しました。観光ビザについては 1 月から日本側旅行社が発行する身元保証書が不要になり、ビザ取得がか

なり容易になります。全体会議でも安倍首相は、「青年交流と大学間交流を倍増し、スポーツ交流を 3 倍に増やす」と述べており、日ロの人的交流の拡大が今後おおいに期待されるどころです。



【11 月 16 日】

大阪日ロ協会結成 40 周年記念・日露国交回復 60 周年・プーチン大統領来日歓迎・記念祝賀会

11 月 16 日、大阪日ロ協会結成 40 周年記念祝賀会が、大阪市内のホテルで約 100 人の参加者を集めて盛大に開かれました。祝賀会では、藤本和貴夫理事長(大阪経済法科大学学長)が「これからも市民交流の拡大に取り組みたい」と挨拶した後、浅井利春・元ウラジオストク日本センター所長が「ロシア極東経済と日本」と題して記念講演。『東方シフト』を強めるプーチン大統領のもとで、経済特区・自由港の設置などロシア極東地域でのビジネスチャンスが広がっている現状を解説しました(講演要旨は次号に掲載する予定です)。

また、来賓のリャボフ総領事が「プーチン大統領の 12 月訪日で日ロ関係が改善され、政治・経済・文化の交流が一層盛んになるよう期待しています」と挨拶、大阪府議会日露友好議員連盟の中司宏会長は「来年は議連でウラジオストクを訪問したい」と応えていました。

関西在住のロシア人歌手、ミレーネ・ヌルさんがロシア民謡や「百万本のバラ」などを熱唱、会場は祝賀ムードに包まれました。

【11 月 19 日】 JIC ロシアセミナー

下斗米伸夫先生の講演会と留学相談会

11 月 19 日、都内にて JIC ロシアセミナーを開催しました。日ソ共同宣言 60 周年を記念し、現代ロシア研究の第一人者である下斗米伸夫先生(法政大学教授)に「プーチン訪日と日ロ交渉の行方」と題して講演をしていただきました。

講演会では、トランプ米大統領の誕生で米ロ関係が今後

大きく動く可能性に触れつつ、その下でもプーチン大統領は「東方シフト」で「脱欧入亜」をめざしていること、安倍首相の 5 月ソチ首脳会談(「8 項目提案」)と 9 月ウラジオストク・東方経済フォーラムでの首脳会談が突破口を開き、プーチン訪日でこれまで固着していた日ロ関係が大きく進展する可能性があること、その際 60 年前に締結された日ソ共同宣言が両国の外交関係を規定する基礎になることなどが、さまざまなエピソードを交えながら話されました。

講演会の後は、恒例のロシア留学説明・相談会を行いました(下斗米先生の講演録は次号に掲載します)。

【12 月 17 日】

ロシア文化フェスティバル・クリスマスコンサート 2016 年のクロージング・パーティ



12 月 17 日、東京・新宿の東京オペラシティにて、2016 年のロシア文化フェスティバルの最後を飾るクリスマス・コンサートとクロージング・パーティが開催されました。

コンサートの開始前には、フェスティバル組織委員会・ロシア側代表のミハイル・シュビトコイ大統領文化特別代理と日本側代表の高村正彦日ロ友好議員連盟会長が、「文化は日ロ両国民をより親しく結びつける」と挨拶、今後の日露関係の発展に向けた協力を強化しようと呼びかけました。

コンサートは、サンクトペテルブルグ室内合奏団による演奏と、ソプラノ歌手、ナタリア・マカロワさんとマリーナ・トレグボヴィチさんによる三大アヴェ・マリア(バッハ、シューベルト、カッチーニ)の歌唱で構成され、会場を埋めた観客を魅了しました。

プーチン大統領の訪日直後という絶妙のタイミングで開催されたクロージング・パーティには日ロ各界から 150 名が参会し、今後も文化交流の活性化に取り組む決意を新たにしました。

2006 年から始まった文化フェスティバルは今年 12 回目を迎えます。また 2018 年は『日本におけるロシア年』『ロシアにおける日本年』と決められました。今年から来年にかけて、双方でコンサートや美術展、映画、アニメなど多彩なプ

ログラムが期待されます。

【12 月 21 日】

在大阪ロシア総領事館で祝うクリスマスの夕べ

12 月 21 日、在大阪ロシア総領事館にて、大阪日ロ協会主催の『クリスマスの夕べ』が開催されました。例年、大阪日露サロンとの共催で開かれていたクリスマス会ですが、今年は大阪日ロ協会の単独開催。領事館周辺の住民にも「せっかく地元で領事館があるのに、一度訪ねてみませんか」と呼びかけたところ、予想を大幅に上回る 220 人もの参加者が集まりました。

会では、初めに日本舞踊が披露され、次いで兵庫県西宮市在住の歌手、ナターリア・コズローヴァさんが歌うロシアのクリスマスソングを楽しみました。用意されていたロシア料理は、予想外の大人数のためあっという間に無くなってしまいましたが、参加者一同ひとときのロシア気分を味わいました。

大阪日ロ協会では昨年に続き今年もロシア訪問視察団の派遣を検討しています。

【12 月 25 日】

クリスマス・ディナー・ショー 日ロ友好愛知の会

12 月 25 日、一般社団法人日ロ友好愛知の会のクリスマス・ディナー・ショーが、名古屋市内のホテルで約 120 人の参加者を集めて盛大に開催されました。小林功理事長(愛知県会議員)が「プーチン大統領の訪日を受けて、日露の交流がより一層拡大するよう活動を広げましょう」と挨拶したあと、愛知県立芸術大学音楽研究科の学生と院生 5 人によ



るコンサートが行われました。曲目は、ショスタコービッチ、チャイコフスキー、ラフマニノフなどロシアの作曲家の手になる曲ばかり。美味しい料理とロシアを感じさせる音楽でクリスマスの夜を過ごしました。

愛知の会では、定期交流しているクラスノヤルスク市から代表団を今春、名古屋に迎え入れる予定です。

【インタビュー】

露日平和条約は達成されるのか

今年の 10 月 19 日でソ日共同宣言は 60 周年を迎えました。同宣言は、両国間の戦争状態に終止符を打ち、外交、貿易経済などの諸関係を完全に樹立することを謳ったものです。この宣言は、両国の議会によって批准され、今日に至るまで平和条約の機能を果たし続けています。なぜなら、宣言には通常平和条約が含む内容の項目がすべて反映されているからです。日本側は、国境線問題が未解決だと主張していますが、宣言には両国の国境画定の条件が明確に記されています。日ソ共同宣言の第 9 項には、次のように書かれています。「ソビエト社会主義共和国連邦は、日本国の要望にこたえかつ日本国の利益を考慮して、歯舞群島および色丹島を日本国に引き渡すことに同意する。ただし、これらの諸島は、日本国とソビエト社会主義共和国連邦との間の平和条約が締結された後に現実に引き渡されるものとする。」

日本は、ポツダム宣言を受諾して連合国に降伏しました。ポツダム宣言の第 8 項には「カイロ宣言ノ条項ハ履行セラルヘク又日本国ノ主権ハ本州、北海道、九州及四国並ニ吾等ノ決定スル諸小島ニ局限セラルヘシ」、つまり、「日本の主権が及ぶ範囲は四つの大きな島と連合軍が決める諸小島に限られる」と書かれていました。マッカーサー連合軍総司令官の日本政府あて 1946 年 1 月 29 日付指令には、北海道から北の歯舞諸島と色丹島を含めたすべての島は、日本の行政区域から除外されると明記されています。英語では *Excluding the Kuril Chishima Islands, the Habomai islands group including Suisho, Yuri, Akiyuri, Shibotsu and Taraku islands and Shikotan island* と表現されています。日本国政府はそれに対して異議を申し立てませんでした。

日本の戦後独立を認めた 1951 年のサンフランシスコ講和会議で、ソ連は中華人民共和国の会議参加が認められなかったことを理由として条約調印を拒否しましたが、日本政府は講和条約第 2 条 C 項で、1905 年のポーツマス条約で獲得した千島列島、サハリン(樺太)の南半分および周辺諸島に対するすべての権利、権原(法的根拠)、請求権を放棄することに同意しました。

日本が放棄した千島列島の地理的解釈の問題は、日本国会で講和条約を批准する際に生じました。当時の西村熊雄外務省条約局長は 1951 年 10 月の国会答弁で「講和条約の中で言及される千島列島の領域には北千島も南千島

アナトーリ・コーシキン

(歴史学博士、ロシア戦略
策定センター上級研究員)



も含まれる」と発言しました。こうして日本の国会は、講和条約批准によって全千島を放棄した事実を確認したのです。

講和条約締結後、日本の政界にはソ連に対する領土要求は歯舞、色丹のみに限定すべきだというコンセンサスがありました。これは例えば 1952 年 7 月 31 日付の日本の全政党による国会決議で確認されています。決議は政府の課題として、米国の占領下にある沖縄・琉球諸島、小笠原、奄美大島、ならびに歯舞・色丹島の返還を求めるよう求めました。これは日本政府の政策に沿うものでした。サンフランシスコで日本政府全権代表を務めた吉田茂首相は、歯舞、色丹は北海道の一部であって、日本が放棄する千島列島に加えてはならないと主張しました。

1955 年 6 月ロンドンで、戦争状態終結・国交回復に関する日ソ交渉が開始されました。講和条約の降伏条件と規定に反し、日本外務省は歯舞、色丹、千島列島、ならびに南樺太を要求しました。日本側が提示した 1955 年 8 月 16 日付条約草案は、戦争の結果ソ連によって占領された日本の領土において本条約の発効日に日本の主権は完全に回復されると規定していました。しかし、日本政府はすぐに、戦争の結果を根本的に見直す試みは失敗し、ソ連との関係を悪化させるだけだと理解しました。それは、日本人捕虜の送還交渉や漁業条約を決裂させ、日本の国連加盟を封じる恐れがありました。そのため、当時、日本外務省は松本俊一全権に秘密訓令第 16 号を出しました。そこには平和条約締結における最小限の要求は歯舞、色丹であると記されていました。しかし、日本外務省はこのきわめて重要な訓令をいまだに公開していません。若宮啓文氏は今年 8 月に出版した「北方領土問題の内幕」でこう書いています。「このころの日本政府は国後、択捉について、サンフランシスコ講和条約で日本が放棄した『千島列島』に含まれるという見解をとっていた。それは条約を結んだ吉田内閣がとっていた見解であり、南千島に属しない『歯舞・色丹』の返還を実現することが、当時の最大公約数的な悲願だったのだ。」と。

日ソ交渉の難航を打開するために、当時のソ連指導者であったフルシチョフは、マリク・ソ連全権に対して、「モスクワ

は日本に歯舞色丹を引き渡すことに同意するが、それは平和条約調印のあとに限る」という、領土問題解決のための提案を示すよう指示しました。松本俊一全権代表は歯舞色丹を返還してもいいとのソ連側提案を初めて聞いたとき「最初はわが耳を疑い、だが、内心非常に喜んだ」と回想録に書きました。それは驚くほどのことではなく、二島の返還構想が当時日本政府の課題であったからです。歯舞色丹を確保すると日本は合法的に漁業水域を拡大できるため、これは日ソ関係正常化への非常に重要な目標でした。

しかし、日本が妥協しようとしたことが米国には気に入りませんでした。ワシントンでは鳩山一郎内閣に強い圧力をかけました。1956 年 8 月、ダレス・米 국무長官は日ソ交渉を決裂させるために、「もし日本が日ソ平和条約で国後、択捉をソ連領と認めることに同意するならば、米国は沖縄と琉球諸島を永久に返還しない」と重光葵外相を激しく威嚇しました。それだけではありませんでした。ダレスは、その場合、アメリカ政府は対日経済援助プログラムも再検討するとほめかしました。

歯舞・色丹の日本への引き渡し方針はフルシチョフの個人的な指示によるものですが、彼はそれを日本への大きな譲歩と見なしていました。フルシチョフは歯舞・色丹の返還が領土問題の最終的解決と考えました。彼は、1956 年 10 月 16 日、河野一郎農林水産大臣にこう言いました。「私はきわめて明確に断固として表明する。歯舞色丹以外の領土問題に関する日本の要求はいかなることがあろうと話し合いを拒否する。われわれはそれ以上の譲歩は一切しない。歯舞色丹は平和条約に従って引き渡されるが、領土問題はそれによって完全に解決済みと見なされる」。

結局、日本側はこのソ連の立場を実際に認め、1956 年 10 月 19 日に日ソ共同宣言に調印しました。そのあとの平和条約締結交渉の経緯は周知のとおりです。

北方領土問題はアメリカに押し付けられた冷戦の産物だと言っても過言ではありません。確かに 60 年前に、日本国の目的は四島ではなく二島でした。この事実を日本の客観的な立場にある研究者も認めています。たとえば、今年 10 月 9 日に日露関係専門家・下斗米伸夫法政大学教授は、朝日新聞の記事でこう言っています。「そもそも『北方領土』とはどこか。51 年のサンフランシスコ条約で、日本は『千島列島』を放棄したが、その範囲については記述がなかった。当初、日本政府は、国後・択捉は放棄した千島列島に含まれると解釈していた。国後・択捉と歯舞・色丹の四島を、日本の固有の『北方領土』だと定式化したのは 56 年 3 月になってからだ」。

2001 年 3 月 22 日に新しいロシア大統領に選ばれたウラジーミル・プーチンは、モスクワで NHK のインタビューに応じて、こう言及しました。「ソ連側は平和条約の調印を条件に

二島を日本側に引き渡すことに同意している。この宣言はソ連最高会議によって批准されており、すなわちこの宣言はわれわれにとって義務的なものだ。繰り返すが、この宣言には平和条約の調印という条件が書かれている。宣言にはいかなる条件でこれらの島々が引き渡されるのかは書かれておらず、これはすべて交渉の対象だ」。このプーチンの発言は、かなり大胆な発言でした。なぜか。ゴルバチョフもエリツインでさえ、日本への領土譲歩を考えても、1956 年の条件が生きているのを正式に認めることができなかったのです。

歯舞色丹二島引き渡しを謳った 1956 年の日ソ共同宣言に基づいて日本との領土問題を解決する用意があったとした 2004 年 11 月のラブロフ・ロシア外相の発言は、日ロ双方に波紋を投じました。ロシアでは、日本へのいかなる譲歩にも反対する人々の動きが活発化しました。東京ではしばらく混乱しましたが、やがてこの提案は拒否され、四島一括返還をめざす立場が再確認されました。

今年 9 月ウラジオストクでプーチン大統領は 1956 年の日ソ共同宣言に明記された条件に対応して交渉する構えであることを再び口にした。一方で、色丹と歯舞に関する項目は確認が必要とされます。プーチンは共同宣言には、どういった条件でこの二島が引き渡されるのか、その場合これらの島の主権はどちらの側に属するのか明記されていないと強調しました。この指摘は当然であり、タイミングのよいものでしょう。なぜなら仮に日本政府が 1956 年の条件に同意したとしても、歯舞色丹を自動的に引き渡すことは不可能であり、込み入った長期の補足的交渉や意見の折り合わせが必要になるからです。

古代ギリシアの賢人も言ったように、「誰も同じ川の水に二度入ることはできない。You can never step into same water twice.」。あるいは「万物は流転する」。

共同宣言が調印されてからこの 60 年間に世界は大きく変わりました。こうした変化は日本に歯舞色丹を引き渡す条件に根本的に関わってきます。

第一に、1977 年に国連海洋法条約が発効し、沿岸国は自国の基線つまり海岸線から 200 カイリの範囲内に排他的経済水域を設定することができるのです。いまや日ロ双方が同意した場合、引き渡されるのは小さな島にとどまりません。豊富な漁業海産物資源に富んだ島周辺の海域もこれに含まれてしまいます。これらの海域を日本に渡すということは、島々の周辺でのロシアの漁業にとっては非常に大きな打撃を意味します。つまり、南クリールの小さな島々を要求することで、日本は事実上 21 万平方マイルもの経済水域を要求していることになるのです。

第二に、フルシチョフ時代にこれら二島の大陸棚から石油、ガスといったエネルギー資源が採掘できるなどとは誰も思いもよりませんでした。採掘技術が発達した今日、ロシア

もこれらの島々の資源採掘の権利を失うわけにはいきません。

第三に、1950 年代にはソ連にもアメリカにも核ミサイルの搭載可能な戦略的原子力潜水艦などありませんでした。ところが、いまや双方ともがこの抑止兵器を有しており、こうした潜水艦にとっては南クリール諸島間にある水深が深く凍らない海峡が非常に重要なのです。なぜなら、この海峡を通じれば、1 年中どの時期でも潜水したままオホーツク海から太平洋への出入りが可能だからです。引き渡される島およびその周辺の海域に将来、日米の軍事施設が建設され、これがわれわれの国に矛先を向ける恐れがあることも危惧の念を呼び起こさずにはいきません。

一方で、安倍首相、岸田外相、菅官房長官は、「相互に受け入れ可能な妥協を模索しよう」というプーチン大統領の呼びかけに、まだ答えることができていません。菅官房長官は今年 10 月 18 日に、「北方四島の帰属問題を解決して平和条約を締結する基本方針の下、交渉を粘り強く行っていきたい」と表明しました。四島返還にこだわることは、領土画定問題に関する外交対決で事実上ロシアの降伏を求めるものです。もし、12 月の日露首脳会談で、安倍総理がその立場に固執するならば、平和条約交渉は躍進どころか一定の前進も不可能だと思います。

事実を客観的に見ると、日本のリーダーにとって、領土問題について新たな政治的決断をすることは困難だと思います。最近日本を訪れたマトビエンコ・ロシア上院議長は、領土問題に関してロシアの立場を次のように説明しました。「ロシアがクリール諸島に対する自国の主権の制限に向かうことは絶対になく、日本の管轄に引き渡すことなどなおさらだ。クリール諸島に関して言うと、諸島に対する主権は日本にとっては議論の余地があるが、ロシアにとっては余地がない。クリール諸島に対するロシアの主権は疑いの余地はない。しかし、双方が満足いくような平和条約の問題に関する妥協案を検討する用意がわれわれにはある。」

10 月 27 日にワルダイ会議でプーチン大統領は、日ロ平和条約に関してこう述べました。「こうしたケースでは期限を決めるのは不可能だし、有害でさえある。」例としてプーチンは中国との領土交渉が 40 年続いたことをあげました。「かつてない水準の協力と多大な信頼があって初めて、交渉は妥結した。われわれはそれを望み、それを目指している。いつどのように達成されるか、そもそも達成されるのか、今言うことはできない。」

このような時に重要なことは、政治的問題を経済問題やその他の問題とリンクさせないで、両国の関係を可能な限り拡大し、事態を後戻りさせない努力を続けることなのです。(2016 年 11 月 4 日／大阪にてインタビュー)

《旅行記》ソロヴェツキー諸島

人を変えてしまう島

【第 2 回】 衝撃の歴史がまとわりつく島に上陸

モロゾフ デニス(JIC 東京)

アルハンゲリスクで一夜を過ごし、早朝に起床。空港までのミニバンは航空会社が無料で手配することになっていたが、前日の状況から見てスムーズにいくと思えず、早めに準備してホテルのロビーで車を待つことにした。時間となり、それらしいミニバンが到着しているのを見つけたが、ミーティングボードはもちろん、ドライバーは客を探す風でもなく、私たちの車かどうかまったく判断がつかない。結局、こちらから声をかけてドライバーに確認、乗り込んで空港に向かう。20 分弱で再び空港ビルの前に降り立ち、他の参加者と合流。チ



ェックイン後、すでに慣れ親しんだ待合室でしばしの時間を過ごすが、またもや搭乗時刻が過ぎても案内は流れず。当然、乗客のイライラ度はピークに・・・、声を

飛ばない飛行機を待つ

荒げて責任者を探す幕は 1 度や 2 度では済まなかった。

およそ 3 時間待たされ、ようやく AN-24 の機内へ。今回は「エンジン冷やし」の演出がなかったので一安心。

ようやくソロベツキー島に到着

飛行機はスムーズに飛びたち、45 分後にはソロベツキー島のガタガタ滑走路に着陸した。タラップを降りて、厚い雲に覆われた念願の島を見渡す。空港は滑走路 1 本のみで、簡易なフェンスに囲まれているだけだ。私たちは飛行機から降りると、そのままゾロゾロ歩いて出口へ向かった。出口では、寝台列車と船を乗り継ぎ予定通り先乗りしていたバルバルカ社のスタッフやその家族が出迎えてくれて、互いに固い握手を交わす。

モスクワでは気温 32 度と日本とさほど変わらなかったが、アルハンゲリスクでは 25 度、そしてソロベツキー島では 15 度と下がってくれて、灼熱の東京から来た私たちにとってはこの涼しさが当初は快適に思われた。

飛行機から下ろした荷物がトラックで運ばれてきて、全員

揃ったところで年代物のマイクロバスに乗り込み、ホテルへ移動。ソロベツキー島では近代的なホテルが 2 軒しかなく、その中の「SOLOVKI HOTEL」に私たちは泊ることになった。



ソロベツキー式の荷物レーン

いた。空港から 15 分もかからないうちに到着して、チェックイン。ホテルはレストランを兼ねた管理棟とログハウス風の 6 つの独立した棟から形成されていて、私たちは 5 号棟で宿泊することになった。棟の入口の応接間の床には頭付きの熊の毛皮が敷かれていた。入口を入ると、いきなり歯むき出しの熊の顔が目にとまるので、誰も一瞬びっくりして少し後ずさりする。



SOLOVKI HOTEL 管理棟前



ワイルドな応接間

客室は 2 つの部屋からなっていて、奥は寝室、手前にはソファベッドが置かれたダイニングがあった。私とアンドレイさんは寝室に陣取り、伏田社長はダイニングスペースで寝泊まりする事になった。

私たちが部屋で時間をつぶしている間に、リュドミーラ社長はロスした時間を取り戻そうと奔走し、昨日予定されていた観光プログラムの一部が急遽実施されることになった。

ソ連製の四駆で島内観光へ GO !

ホテルの入り口に横付けされたソ連製(ロシア製ではない、もっと前のソ連時代に製造)の錆びついた四駆ジープと黄色い四駆ミニバンに分乗して島内観光を開始。ソロベツキー島内の道は道路と呼べるようなものでなく、限りなくオフロードに近いデコボコの道だった。にもかかわらず、ドライバー兼ガイドのユーリーさんはミニバンを結構なスピードで走らせる。車内で普通に座っていることは至難の技、誰もが取っ手や座席のへりにつかまり、必死に体勢を保たなければならなかった。



今日の移動手段



大揺れにご注意

「フィリップの庭」

最初のポイントは「フィリポフスキー・サドキ」、直訳すると「フィリップの庭」と呼ばれる場所だった。この「庭」とは、16 世紀の著名な人物、フョードル・コリチェフ(後のモスクワ大司教フィリップ)が発案したと言われる人工貯蔵池。当時の修行僧は天気の良い日に海に出て魚を釣り、それを食糧にしていたようだ。しかし悪天が続くと釣りに行けなくなってしまう。そこで発案されたのがこの貯蔵池。浅い入江の一部に石積みの堰を築いて海から分断し、そこへ獲れたタラやニシンを放す。天気の悪い日はこの池から魚をすくい上げて、次に海釣りができるまで食い繋ぐという仕組みだったようだ。時代の移り変わりと共に冷蔵技術が進化し、「フィリップの庭」を使う機会は少なくなっていった。そしてソ連時代には完全に放置され、草が濛々と茂る今の姿となった。

「セキルナヤ山」

次の目的地は「セキルナヤ山」だった。伝説によるとこの



石積みでせき止められた「フィリップの庭」へ

山(といっても高さ100メートルくらいの丘だが)の近くの入り江にソロベツキー島の開拓者、聖サバティと聖ゲルマンが上陸したとのこと。歴史研究家は山の名前の由来として「伐採の場」(古代ロシア語ではセキーラは斧という意味)という説を有力視している。二人の開拓者はこの山の木々を伐採し、最初の教会や自分たちの小屋を建てたのではないかというのだ。しかしロシア正教会の説は異なっており、キリスト教には珍しく暴力的である。教会の説によれば、二人の開拓者が上陸に成功し生活を営み始めたことを羨ましく思った近隣の島の漁師が家族を連れて島に住み移り、開拓者の小屋の近くに住処を構えた。ここは聖なる場所だという忠告を聞き容れず、しばらくそのまま暮らしていたが、ある日、開拓者の一人は女性の悲痛な叫びを聞きつけた。森の中を探したところ、泣き崩れている漁師の妻を発見した。彼女の話によると、長身で金髪の2人の青年が突然現れて女性をとらえた後、彼女を細い木の枝で思いっきりひっぱたき(木の枝でひっぱたくは古代ロシア語で「セキーリチ」)、聖なる場所から即刻立ち去るよう厳しく命じて、消えてしまった。開拓者は金髪の青年を天使に違いないと女性に伝えたところ、漁師はたちまち島を離れ、二度と現れることはなかったという。今となっては傷害罪か脅迫罪に相当する事件だが、ロシア正教会はそれを巨大な石の記念碑に刻みこみ、山の入り口に飾った。ガイドの話によると日本と同じく、昔のロシアでは多くの聖地(修道院など)が女人禁制だったという。

SLON (ソロベツキー特殊収容所)

山の中腹には非常に目立つ赤い十字架が立っていた。ソロベツキー島の十字架はすべて特殊な形をしていて、「拝み十字架」と呼ばれている。この赤い十字架の回りには古い井戸のほか、大きな説明看板が数点建てられていた。

今まで元気はつらつだったガイドのユーリーさんはここでいきなり小声になり、暗い表情でこの場所の歴史を語り始めた。それを聞いた私は自分の耳を疑った。とてもすぐに受け入れられる話ではなかったのだ。

ソロベツキー諸島は1920～1939年の間、SLON(ソロベ



赤い「拝み十字架」

結果、多数の小さなメモ紙を見つけた。これらのメモは囚人たちによって隠されたもので、その内容はぞっとするものばかりだった。集団銃殺についてのメモ、遺体が集められた場所を記録したメモ、集めた遺体がどこかの穴に放り込まれたことを示すメモ、遺体の上に石や土をかけ、さらにその上に新たな遺体が捨てられた経緯を記したメモなど、目を覆いたくなるものばかりだった。しかしいくら探しても肝心の遺体が捨てられた場所が見つからない。



集団墓地の穴の場所を示す壁画

2006年に第2次研究チームが編成され、再び調査作業を開始。その際、ボズネセンスキー教会の壁に墨か煙草の灰で書かれた小さな絵が発見された。実はこの絵は前年の研究チームも見たのだが子供の落書きだと思い、見過ごしたらしい。その絵には大きな家(教会)が描かれ、そこから下に伸びている1本の太い道があり、そしてその末端から無数の点に伸びている細い線があった。この絵と囚人たちのメモをもう一度照らし合わせ、セキルナヤ山の山麓を重点的に発掘した結果、多数の穴が発見された。

私たちが立っていた赤い「拝み十字架」の場所は、囚人たちが銃殺された後、遺体の収集広場として使われていたようだ。そこから下に伸びる1本の道があり、その先には集団墓地があった。ガイドのユーリーさんは、「行きたい人だけ行ってください」と言った。彼は、以前一度だけ行ったようだが、「もう二度と行きたくない」と話した。グループの半数は行かず留まった。結局「死の階段」を降りて行ったのは、日本組の2名とリュドミーラ社長、もう一人の女性客の計4名だけ

だった。



遺体が何層にも捨てられていた穴の一つ

階段を下りるにつれ、今までに感じたことのない、言いあからわせない空しい感覚に襲われた。一段下りる毎に心臓が腹部に徐々に沈んでいく。ドキドキするというより、震えがだんだん強くなっていく。周りの空気なのか、何かがそうさせていくのだ。階段の先には少し開けた場所があり、木々の間に今にも切れそうなロープに囲まれた四角い穴が点在していた。穴の隣には墓標の十字架が立てられており、その下部には9、6、12、26などといった数字が記されていた。数字の下には小さく「人」と書かれていた。それは、それぞれの墓標の近くの穴から発見された遺体の数であった。

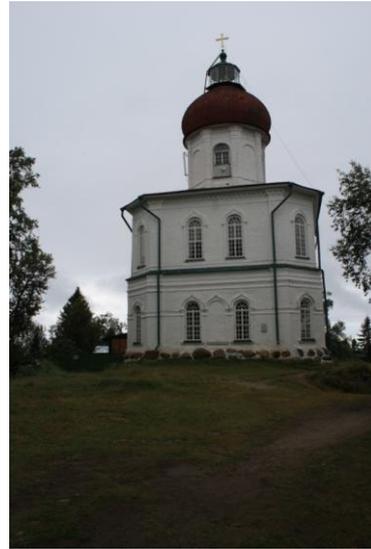
私たちが立っていた場所では、長年にわたり人がごみのように捨てられて、忘れ去られていた。ここにいると決して「怖い」とか「恐ろしい」とか、そういう感情ではなく、ただただ悲しく、そして悲しさを乗り越えて空しくなる。自然に手を合わせたくなる。そしてなぜか分からないが、許しを請いたくなる。同じ人間が、このような酷いことをやっていた。ひんやりとした空気は、このような伝えきれない空しさや哀しさに溢れていて、触ろうと思えば指先は物理的にその感情にタッチできるほどだ。とんでもない空間であった。

「ボズネセンスキー教会」

グループと合流して、私たちは重い足取りでセキルナヤ山の山頂に立つ「ボズネセンスキー教会」へと向かった。この教会は普通の教会ではなく、灯台としての機能も備えていた。19世紀に建てられて以来、およそ100年にわたって8月15日～11月15日の間、漁師や商業船のために暗い海を照らし続けてきた。言い伝えによると、その光は100キロも先に届いてほしい。

しかし、特殊収容所の時代には、ここは最も恐ろしい「懲罰房」として使われていた。逃亡を図ったり、労働を拒否したり、密かに宗教的な儀式を行ったりした囚人たちはこの教会に送られ、非人間的な扱いを受けた。真冬に衣服のほとんどをもぎ取られ、凍死しないために「人間の積み木」を作らざるを得なかった。「人間の積み木」とは、まず床に数人の

囚人が列をなして寝そべる。その上に今度は横に列を作った囚人が覆いかぶさる。こうして何層にもなって寝ると、真ん中



ボズネセンスキー教会

ちが教会の窓際に立たされ、その一部始終を強制的に見せられていた。

教会のすぐ横に山を下る長くて急な数百段の階段がある。史実かどうか分からないが、この階段も囚人を死に至らしめる虐待の道具として利用されていたという。人を丸太に縛り付けてここから突き落としていたらしい。麓に辿り着くまでに、人は肉の塊に化してしまっただろう。

この恐ろしい階段の近くには展望台が設けられていて、目下には北国特有の森林や白海の美しい景色が広がっていた。しかし、それを眺めるグループ・メンバーの表情は石のように固かった。誰もがつい先ほど聞いたばかりの話と周りの景色を照らし合わせ、理解できるはずのない人間の残酷な行為を何とか脳内処理しようとしていた。セキルナヤ山に足を踏み入れた体験は誰の心にも響き、大きな痕跡を残したに違いない。少なくとも私はそうであった。

ソロベツキー植物園

その後はソロベツキー植物園を見学した。北極圏に最も近い植物園として知られているとガイドが誇らしげに話す。いうまでもなく、ここも囚人の手によって作られたのだ。素敵な並木や珍しい花は来客を楽しませてくれるが、私の目にはあのセキルナヤ山の風景がこびりついて離れない。たったの30～40分では気持ちを切り替えられるものではなかったようだ。

散策後、一同は村の中心部に戻り、次の観光プログラムの集合場所でしばし時を過ごした。コーヒーを飲んで待つ人がいれば、ウォッカを飲む人もしかり。

スーパーガイド登場

時間となり、新しいガイドのオレグさんが現れた。私もガイ

ドとして働く機会があるのでガイドの善し悪しはよく分かるが、彼はまさにスーパーガイドだった。

ソロベツキー諸島の不可思議な気候や植物・動物の生態から話が始まり、徐々に白海の内海へとグループを誘導しつつ、古代民族や彼らが大量に残した謎のストーン・サークルに物語をつなげていく。その後はロシアの6世紀(15~20世紀)にわたる歴史とソロベツキー諸島で起こった出来事を並べて、この「聖なる島」がいかにすごい場所であるか、ロシアの歴史の中でどれほど多くの影響を与えたかを披露する。

神話や伝説、そして最近かなり幅を利かせるようになった教会の立場や見解に左右されることもなく、彼は客観的かつ冷静に様々な事件や出来事を分かりやすく解説していった。3時間のエクスカージョンはあっという間に終わり、オレグさんの見事なガイドイングに私は素直に脱帽した。



ガイドのオレグさん(右)



謎のストーン・サークル

* * *

ホテルに戻った後、私たちは夕食を摂り、早々に眠りについた。外は秋の気配をたっぷり含んだ時雨がしとしと降っていた。(3日目に続く)

サハ共和国 ダイヤモンドウィーク(1)

鉦山の町、ミールヌイを訪ねる

金井 義彦(JIC 東京)

本紙連載中だった『エクメネの最果てへ』はサハ共和国冬の旅の真っ最中で止まっていますが、こちらは夏の旅、ダイヤモンド鉦山の町ミールヌイのご紹介です。

<アルロサ航空 ヤクーツク~ミールヌイ>

首都ヤクーツクから西へ約800キロメートル。ダイヤモンド鉦山の巨大な穴があるミールヌイという町への日帰り旅行です。往復利用する航空便は『ダイヤモンド生産採掘企業アルロサ社』のチャーター便、アルロサ航空。機材はヤクーチア航空のものが使われていましたが、機内食の箱のデザインにはしっかりとダイヤモンドが輝いています。

JIC撮影(2015年9月)



片道約1時間半のフライト。搭乗券には指定座席がきちんと印刷されていますが、現場の機内では「自由席」というアナウンスがされ、その「自由席」にはビジネスクラス用シートも含まれており、数名がしっかりと席を確保していました。

<ミールヌイ空港>

ミールヌイ空港に到着。降機するとヤクーチア美人から歓迎を受けました。大きなパンのようなものをひと口ちぎっていただきます。そのままバスに乗り込んでターミナルに寄らず、空港エリアから町へ出ました。小さいターミナルですが、一応キオスクとかわいらしいおみやげ屋さんがあります。

JIC撮影(2015年9月)



<ミールヌイの町>



ミールヌイ唯一の大型ホテル『ザルニーツァ』です。部屋数は約80、レストランは450人収容可能なサイズ。スタンダードクラスのホテルです。町の中心、レーニン広場に面して建っています。そのレーニン広場には行政機関、文化宮殿、座っているレーニンの像があり、子どもたちが遊んだり奥様がベビーカーを押しておしゃべりをしたりしています。夏の季節は短いですが、花がきれいに咲いていました。

町の見どころはダイヤモンドの母岩、キンバーライトが整然と並べられて展示されている博物館、そしてアルロサ社です。アルロサ社社内見学の入館時に自分のパスポートを「人質」として預ける必要があります。目の前に無数のダイヤモンドが散りばめられている状況でアルロサ社員スタッフのロシア語解説を聞いていると、まず誰もがこのダイヤモンドを全部売ったらいくらになるだろうと考え、次にガラスケースを叩いて割ってダイヤモンドを盗んで逃げようと、いけないことを想像するのです。その後すぐに「だからパスポートが奪われているのか。逃げられないのだな」と気付くのです。

昼食はサラダ、メイン、スープのいわゆる「ビジネスランチ」が300ルーブルくらいで食べられるようなカフェレストラン・チェーン店があり、ここではロシア料理のメニューを選ぶこともできます。ソバの実(グレーチカ)、ミートボール(フリカデーリキ)、キュウリのクワス冷製スープ(アクローシユカ)、毛皮のコートを着たニシン(セリョートカ・パド・シューバイ)のセットを注文しました。



<採掘現場へ>

ヴィリュイスコエ・カリツォー広場を見てから町を離れ、ダイヤモンド母岩採掘現場に向かいます。途中、町の入口には、「ミールヌイ」とロシア文字で書かれた碑、そのそばには、1957年に町へつながる道を開通させた人々の名前が刻まれた記念碑があります。バスで40分ほど、南西24キロメートルの移動でイレリャフ川のダイヤモンド母岩採掘現場に到着。採掘船は水深12メートル、さらにその下、地下7メートルの岩を掘ります。この採掘船が作業できるのは川の凍らない短い夏の期間のみ。その時期に集中して24時間フル稼働させるために8時間×3シフト制で採掘しています。

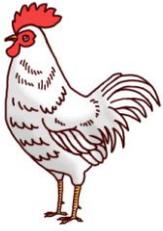


<ミール鉱山>

ミールヌイの巨大な穴、ダイヤモンドのミール鉱山は空港すぐそばにあります。1957年から2001年まで地表から掘って広がった穴の大きさは直径約1,200メートル、深さ525メートル。ダイヤモンド鉱山としては世界最大のサイズになります。穴のそばには穴の底をよく見ることができるよう、戦車のような形の展望台が設置してあります。そこから肉眼や双眼鏡を使って穴を覗くことができます。規模が巨大すぎて、大きさを実感することができませんでした。可能であれば、もっと上空から見たいところです。

ミールヌイはダイヤモンドのためだけに作られた町で、欲望渦巻くギラギラした町をイメージするかもしれませんが、現在は町の名前『ミールヌイ: 穏やかな』の意味の通り、穏やかでのんびりとした雰囲気です。(つづく)





JICスタッフより新年のご挨拶

今年のテーマは、「2017年の夢」

謹賀新年！ 本年もJICをよろしく願い申し上げます。

*1月号恒例のスタッフ新年あいさつ。今年はテーマを設定しました。

テーマは、「**2017年の夢**」。仕事の夢、プライベートな夢、大きな夢、ささやかな夢、実現したい夢、実現させる夢、夢のまた夢…、いろいろな夢があります。中には必ずしも夢と関係ない記事もありますが、どうぞ各スタッフからの新年メッセージをお楽しみください。

「JICブランド」を！挑戦の年

モロゾフ デニス (JIC 東京)

明けましておめでとうございます！

いよいよ、「波乱」の年の幕開けですね。

すでにご存知の方が大勢いるかと思いますが、1月1日からロシア人観光客を対象にした新しいビザ制度がスタートしました。自己支弁を証明できる書類を用意さえすれば、日本の旅行会社からの身元保証書類がなくとも誰にでもビザが簡単に取得出来るようになりました。平たく言えば、ロシアや日本の旅行社を介せず日本に来られるようになった訳です。

これをきっかけにロシア・インバウンドの業界は大きな変革を迫られるに違いありません。ビザ・サポートのみをやっていた業者は消え去り、多くの旅行会社が淘汰されます。この新たな時代に適応して生き残れるのは、「商品力」、「企画力」、「集客力」（いわゆる「ブランド力」ですね）、そして長年ロシアの旅行会社や個人のお客様と「信頼関係」を培ってきた一握りの旅行会社だけだと、私は見えています。そして、わが JIC 旅行センターはこの一握りの「勝者」の一員になるべく、今まで様々な努力をしてきたと思っています。

人気の商品にさらなる力を入れながら、他社にない「JICブランド」だからできる新たなツアーやパッケージを提案していく。日本のありとあらゆる良さを実感できる旅行商品を作る。品質を決して落とさない。お客様の期待を裏切らない。言い換えれば、「永久保証」付きの旅行商品を売る会社。活路はきつとこういう「ブランド力」の開発にあるのではないのでしょうか。インバウンドチームは智恵を絞りあい、意見のぶつかり合いを繰り返して、「JICブランド」を育てる。今年はそういう年



になると思います。

逆境を楽しみ、新たなチャンスをつかみたい。いつも遊び心を忘れずに（笑）。これが私の 2017 年の夢ですが、正夢にしたい夢です！

「夢」を「かたち」にする仕事

神保 泰興 (JIC 東京)

あけましておめでとうございます。

私が主として担当しているアウトバウンドの「手配旅行」（オーダーメイド旅行）は、何よりもまず、お客様ひとりひとりが抱く「夢」を「かたち」にする仕事だと考えています。1人1人のお客様が持つロシア旅行のイメージは、具体的であったり、あるいは漠然とした希望であったり、様々です。それを伺い、そこに現実の航空便のスケジュールや、ホテルや観光スポットなどを当てはめ、あるいは提案し、安全や快適さなどに注意しながら、一つのオリジナルな旅行プランに仕上げるのは、地道ながらも様々な想像力と自身の経験と記憶の引き出

しを使っての創造的な作業です。

2016年12月のプーチン大統領の日本訪問を契機として、2017年、日本とロシアの人々の相互往来を取り



巻く環境は大きく変化します。今回のプーチン大統領の日本訪問では、両国間の懸案について、巷で期待されたような目に見える大きな前進はないように見えますが、相互理解をより深めていく必要があることがはっきりしたということに、異論のある人は恐らくいないと思います。今から

20数年前、18歳の時の私がそうであったように、ロシアの地に実際に足を踏み入れ、現地で実際にロシア人と触れ合うことでしか理解し得ない、隣国の本当の姿はたくさんあります。その意味で、私どもジェーアイシー旅行センターの業務は、日本とロシアがあるべき、将来の「夢」を「かたち」にする重要な責任を担っているということを実感します。もちろん今年も、業務のいとまに、自分自身も1人の旅人として、より深く彼の国を理解する機会を見いだして参りたいと思います。

今年もどうぞよろしくお願い致します。

「夢」についての一考察

小原 浩子(JIC 大阪)

様々なことに夢を見られるような年ではなくなってしまったので、夢と言われるとすこし戸惑います。中学生や高校生のころは、おいしいものが食べられることや高価なプレゼントをもらうこと、素敵な人と結婚することや安定した暮らしを送ることなどを夢見たものですが、今となってはそんなことは夢というにはあまりにも現実的で、どうにかして自分でつかみ取るしかないものなのだと思います。だから今はただ夢見ていることも、10年後にはそれも自分の頑張りでつかみ取れることなのだとと言えるようになるのかもしれないですね。自分の中であるべき理想を描くことが「夢」をみることなのかなと思います。

昨年、「コーヒーが冷めないうちに」という、自分が会いたい人にコーヒーが冷めるまでの間だけ時間を後戻りしてもう一度会うことができる、という設定の小説(舞台)がありました。これも夢の一つなのだとすれば、もう一度会いたいと思うの

は30年前に他界した私の母です。そうか、もう30年たったのかと思うとともに、小説の設定とはちょっと違うけれど、母が今生きていたらどうなのだろうと考えることがあります。料理が上手だった母は、生きていたら今でも夏には梅酒をつくり冬には白菜の漬物を漬け、クリスマスの前日にはケーキを焼いて生クリームで飾り付けをしているのだろうか、そして揚げ物の苦手な私に揚げ物のコツを教えてくれるのだろうか、私の子供をみてどんなふうに言ってくれるのだろうか...

母が亡くなってからは、自分がつらい時期や大変な時になぜか助けが現れたり状況がいい方に変わったりしたときには、



は、死んだ母が助けてくれているのだと勝手に思っていたのですが、本当に助けてくれたのかも聞いてみたいものだ。

ただ夢がかなって実際に母に会ってみると、「今はもうお店の漬物の方がおいしいから自分で漬物なんか作らないよ」と言ったり、「自分のことで精いっぱい、あなたのことに気が回ってなかったわ、なんとかなっ

ってよかったね。」などと

言われて、ちょっとがっかりするかもしれないですね。

変えられない過去は、美しい夢のままで置いておいたほうがいいのかもしれない。

あつ、私の2017年の夢ですか？ それは秘密です(笑)。本年も宜しく願いいたします。

大空を飛ぶ

田村 美紀(JIC 東京、バリアフリー観光推進機構)

物心がついてからというもの、現実的・非現実的を問わず大小様々な夢を持って今日まで過ごしてきました。振り返ってみると、幼少の頃の「お姫様になりたい」「おもちゃ屋さんになりたい」といったような自己欲求100%の空想ワールド全開状態から、「運動会で一等賞をとる」「テストで平均点より上を目指す」「大学合格」「ノルマ達成」など日常生活の充実を目的とした現実ワールドへと成長して、さらなる満足を求めて自分だけでは完結しない社会、地域、国、世界の幸福につながる現在のバリアフリー観光推進活動へとたどり着いたように思います。

豪邸に住み、上質な衣服を身にまとい、高級車に乗る大金持ちのマダム生活に憧れないと言えば嘘になりますが、心からそれを願い叶えようとする自分が今ここにいないということは、私の心を満たす何かはもっと別の場所にある、あるいは自分の中にすでにあるということなのかもしれません。



さて、前置きが長くなりましたが、2017年の私の夢は「大空を飛ぶこと」。パラグライダーを自分で操縦して大空から世界の壮大な景色を眺めたいと思っています。パラグライダーで空を飛ぶには、速度をつけて山の斜面を駆け降りる必要があるため、足に障害がある私がこの夢を叶えるには専用の車いすを開発したり、道具に工夫を凝らしたりして、一般的なパ

ラグライダーのライセンスを取得する以上に時間や労力を費やさなければなりません。この夢を実現させることは、私自身の幸福感を満たしてくれるだけでなく、そのために力を貸してくれる友人やパラグライダーの専門家、道具開発に携わるみなさんの達成感にもつながるものですし、心身に不自由をかかえながらも空を飛ぶたいと願う人達の夢を叶える礎になるものと確信しています。

ロシアに行きた〜い！

田邊 由紀子(JIC 東京)



新年明けましておめでとうございます。私の2017年の第一の夢は、何年ぶりにロシアの地を訪れることです。留学したモスクワ方面と、未知な極東方面の都市を訪れること。

ここ数年、この夢への妄想を膨らませながら、JICでお仕事をさせて頂いております。ロシア再訪の為に、2年ほど前に

パスポートを用意しましたが、未だロシアビザと入出国スタンプは無く、虚しくも綺麗に真っ白な状態です。

皆さんのご旅行のお手伝いをしながら、「ここに行きたい」「この列車に乗りたい」「このホテルに泊まりたい」などと、オフィスでは半分冗談のように言っておりますが、実は半分は本気です！チャンスがあれば、いつでもロシアへ発つ心の準備だけは出来ています。若いつもりだった私も、もういい年になりましたが、やはり女性としてはお姫様気分を味わいたいもの。『お城のような素敵なホテルに泊まり、美味しいロシア料理を頂き、ロシアの美術や音楽を堪能し、心豊かな数日間を過ごしたい…。』『仕事、家事、子育てと、バタバタな普段の生活から離れてみたい…。』そんな事を考えながら、毎日通勤電車で揺られています。

昨年末にはプーチン大統領が来日され、各放送局のニュースやテレビ番組で何度もロシアが取り上げられました。今年は少し日本の皆さんにも関心を持って頂ける、ロシア注目の年になるのではないのでしょうか。きっと日露関係も良い方向へ向かうはず。この時だからこそ、移りゆくロシアをこの目で見たいものです。

そして今年は私の周りを取り巻く環境が少し変わる予定なので、これまでよりはロシア行きの実現率が高まるのでは、と密かな期待を抱いています。来年にはロシア旅の報告ができる信じて、2017年も机上のチェブラーシカに癒されながら、JICで日々の業務に取り組んでまいります。どうぞ宜しくお願いいたします。

南千島の共同開発が実現したら

キリチエンコ・オリガ(JIC 東京)

皆様、2017年あけましておめでとうございます。

昨年は色々とお世話になりました。今年も宜しくお願い致します。

今年のお題は「夢」。読者の皆さんにとって何が興味深いだろうかと考えましたが、私の中では適当な話題が見つからなかったため、昨年12月のロシア連邦大統領の日本訪問をテーマにすることにしました。

これは、ロシア大統領の最初の訪日ではありませんでしたが、北方領土問題の解決という、多くの日本国民が長年抱えてきた大きな夢を実現するうえで、小さな希望を吹き込む訪問になったと思います。

簡単に言えば、プーチン大統領の訪日目的は、露日間の政治、経済、文化等の様々な関係の拡大でした。それは両国間の友好と信頼関係を構築し、相互に大切な夢の実現が不可能でなくなり、平和条約の締結につながる大事な



一歩になったと思います。



国後島の泊山、ロシア名:ゴロヴニン火山、キピャーシエ湖、ゴリャチエ湖

北方領土問題解決の方法と南千島の運命が最終的にどうなるか、推測するのは不可能ですが、戦後70年以上経過した今、世界が困難な状況にも関わらず、互いに両国の利益の為に様々な分野で緊密な協力を開始することを決定したという事実は素晴らしいと思います。首脳会談で両国間の「不和のリング」となっている南千島の共同経済開発が合意されたことで、日本国民の夢の実現が近づいていると感じます。

数年後に南千島を訪問すると、島のある部分にはロシア王朝の宮殿のようなホテル、ロシア正教の大聖堂、バーニャ(ロシア式風呂)などがあり、一方、別の部分には鯉のいる池と日本庭園、日本の伝統家屋を模したコテージ、お寺や神社、温泉などがあるかもしれません。ロシアと日本の二つの文化が相互接続される観光地に滞在したら、どんなに素晴らしいか想像してみると楽しくなります。観光客はロシア料理や日本料理を味わい、散歩しながらサラファンや着物をまとった女性達の姿を見て目を楽ませます。綺麗な空気、青い空と千島列島の美しい景色、素敵だと思いませんか。こんな夢が叶うといいですね。

新年に皆様のすべての夢が叶うよう、お祈り申し上げます！

「NOWHERE」

井上 沙弥香(JIC 東京)

昨年、「君の名は。」という映画が大ヒットしました。映画では、夢の中で2人の登場人物の心が入れ替わり、ドタバタ生活が唐突に始まります。初めはコミカルなストーリー展開なのかと思わせ、物語の中盤では2人にまつわる衝撃の真実が判明します。

「まだ会ったこともない君を、これから俺は探しに行く」。それがこの映画のテーマです。

夢というものは不思議です。

夢とは、自分が経験した記憶やメディアなどを通してみた情報などが記憶整理として眠っている間に夢として映し出されるものだとされているようです。

ただ私はどうしても単なる記憶整理とは思えないような印象的な夢を数カ月に一度、ときには数年に一度、見ることがあります。

その夢を初めに見たのは小学生の頃でした。夢の中で私は男性と話しをしています。私は話し以外の何をするでもなくその日あったことをまるで母親に話すように一生懸命に彼に話すのです。

目が覚めたばかりの時はその男性の顔をはっきりと鮮明に覚えています。彼の顔を覚えているうちに、彼は一体誰だっただろうかと記憶を巡らせます。しかし彼は、友人でもなく、血の繋がりのある人でもありません。恐



らく彼は実在しない自分の夢の中の想像上の人物に過ぎないのだと思います。小さな頃は目が覚めると悲しくて泣いていました。彼は自分

がいる世界には存在しない人なのだということが悲しかったのです。

不思議なことに想像の彼は今でも夢に現れます。

映画「君の名は。」を見て、このようなおぼろげな誰とも分からない誰かを思い出すような気持ちを誰しもが抱えているのかなと感じました。この映画は単なるストーリーの面白さだけではなく、誰の心にも存在するそういったモヤモヤとしたものを表現できたところも魅力なのかなと思います。

私はこれからも「彼」の夢を見続けるのだと思います。

素晴らしい舞台に出会う

中林 英子(JIC 東京)

2017年の夢は素晴らしい舞台に出会うことです。

私はモスクワ留学中に、世界最高峰の芸術を誇るロシアにいるのだからと、多くの劇場に通いつめました。日本に帰国してからは少し遠ざかっていましたが、昨年、歌舞伎座に行ってみようという気になりました。最初は衣装、髪、大道具が全て揃った舞踊の舞台を見て、理解、演目のイメージを広げたいと思ったのがきっかけでしたが、すっかり舞台の非現実の世界に魅了されました。日本でもまた、新しい楽しみが増えました。

素晴らしい舞台に出会った時は、二度と同じものを見

られないからこそ、その瞬間にその場において良かったと感じます。留学時代には気軽に劇場に行き、色々な感動を度々体験していたのを思い出します。

今年は3月にグルジアバレエ、6月にはボリショイ劇場の来日公演があります。私にとっては思い出の懐かしい劇場です。グルジアバレエはボリショイ劇場のプリマだったニーナ・アナニアシヴィリさんが2004年に芸術監督に就任して、現在にまで至るバレエ団です。就任当初は資金不足、設備の不備など多くの問題があったそうです。劇場も長年改装工事中でした。しかしやっと一昨年前にトビリシにバレエオペラ劇場がオープンしました。豪華で重層感のある美しい劇場です。いつも満席でトビリシでは多くの人が楽しんでいるのが伝わってきて、温かみのある劇場でもあります。

ニーナさんは私がモスクワ留学中からずっと見てきたダンサーです。今回がクラシックを踊るの最後の舞台です。涙が出るほど感動した舞台、そして、モスクワでの生活を重ねると、様々な思い出が同時に思い出されます。今度もまた、夢のような素晴らしい舞台に出会えるのは間違いと思います。



トビリシ オペラバレエ劇場

旅券。

金井 義彦 (JIC 東京)

こちらの枠をいただいて連載『パスポート』を書き続けていきましたが昨年、11回というとても中途半端な回数で連載終了となりました。年1回連載、11年間のご愛読ありがとうございました。内部事情を話してしまいますと、この枠は昨年まで自由テーマでした。私自身で「パスポート」というテーマを決めて、自分勝手に連載形式で書き続けていただけなのですが、昨年はそれほどパスポートを持って飛び出すこともなく、そのため関連した話も少なく、いつも旅先で書くようにしていたこのテ

マも続ける限界だ、と思っていたところでした。しかしタイミングよく今回は「2017年の夢」というテーマを与えられ、もちろんテーマにパスポートを絡めることもできるのですが、素直に新しい道を歩き始めることにします。

私は音楽グループとしての活動をやっていて、2、3か月に一度くらいの頻度でライブバーに出演して歌ったりしています。けれども昨年後半からメンバー同士のスケジュールを合わせる事が難しくなっていて、全員で音楽活動をする事ができない状況になっています。せめて私一人だけでも活動を続けて糸が切れないようにしていきたいと思っていますのですが、そのためにはまず一人でステージを展開できるようにならないといけません。今はまだどんな形になるかわかりませんが、極小規模で構わないので今年もどこかでエンターテインメントを続けていられたらと思います。そんな了見、りょうけん、、、りょけん、です。



今年やり遂げたいこと

五十嵐 真夕 (JIC 東京)

新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。

JIC インフォメーション新年号はスタッフの挨拶が恒例と

なっているのですが...、私はここ数年、海外出張・旅行もしていなければ、まともな国内旅行すらしておらず、正直、毎年ネタがなくて困っています。

昨年末も、社長から原稿募集のメールが来て焦りました。やばいぞ、またネタがない...、どうしよう。そうだ！一部の女子社員で時々開催している女子会のことでも書こ



うかな。そうしよう♪と決め、書き始める前になんとなくメールを再確認したところ、なんと今年はテーマが決められているではありませんか。最初に見たときは全く気付きませんでした、テーマは「2017年の夢」。や、やけに限定的。

と言うわけで、女子会のことは書けなくなったので、夢と言うにはあまりにも小さいのですが、今年やり遂げたいことを列挙してみます。

① 家族旅行！ これはやっぱり一番実現したい夢ですね。保育園に通う長男が4月から年長さんになるので、保育園生活も最後の1年となります。保育園は決められた夏休みもないので、私の繁忙期を避けたどこかのタイミングで、家族旅行をしたいと思っています。国内でいいから、どこかに行きたいな～。

② 3キロ痩せる！ 出産後、30代に突入し、代謝も落ち...、ここしばらく人生最大の体重をキープし続けているので、少しばかり減らしたいと思います。毎日の地味な筋トレとささやかな節食。これでいけるかな～。でも、食べるのが大好きなので無理かも～^^

③ 財布を買い替える！ 今私が使っている財布は、入社後初めていただいたボーナスで買った思い出の財布です。もう丸10年も使い続けてボロボロになっているので、また長く使えるよう、ちょっといい財布に買い替えたいと思います。「そろそろ買い替えたいな～」と実際に言い始めてから1年は経っているので、今年こそは！

夢と言うか目標ですね。それでは、来年はもっと書きやすいテーマをお願いします！

今を全力で！

小西 章子(JIC 大阪)

あけましておめでとうございます。JIC 大阪でロシア語留学・研修の手配を担当している小西です。今年もよろしくお願い致します。

昨年12月、サンタさんからのプレゼントについて娘と話していたとき、あまりにも娘の希望が控えめだったので、「ゴディョのチョコレートを山盛り、とかどう？ママ、トラック1台ぶんくらい欲しいわ～」と大げさに提案してみたら、「ブタになっても知らんで！面倒みーひんで！」ときつい関西弁で一蹴されました(笑)。加えて「ママいつもバタバタしてるからもっとゆっくりできる時間お願いしとき。ついでに、絵本読んでくれる時間と、おやつ作る時間と、服つくる時間もやで」って...。子供はよく見てるもんです(反省)。それにしても、サンタさんへのお願いの小ささと、きつい口のきき方のギャップがすごくてびっくりですが。

1日は24時間、みな平等。子供がおり、今も時短勤務を

させて頂いているので、他のスタッフよりも仕事以外に使える時間が多いはずなのですが、毎日がそれはそれは慌ただしく、自分でもいったい時間はどこに消えていったら



う？と疑問に思います。やりたいこと、やるべきことは山のようなのに、何1つクリアできていない。また今日も、何もできずに終わってしまった。その繰り返しです。

でも、よく考えてみればそれらはほんの小さなことばかり。10分あれば余裕でできてしまうようなことだらけです。子供の園服のワッペンが取れかかっているから補強しないとイケないとか、洗濯機で洗えないニットを手洗いするだとか、撮った写真をパソコンに取り込むとか、そういうこと。一瞬で終わりそうなことになかなか手を付けられないのです。たまに気合を入れてやると気持ちもスッキリ晴々。はい、分かっているのです。今年はその気合、たまにはではなく頻繁に入れていきたいな、と思っています。思い立った今がその時、そう思いたいです。

なんだか夢というより目標の話になってしまいましたので、最後に一言。遊びも全力で。子供も大きくなって体力もついてきたので、お金も時間もかかるけれどプライスレスな経験をすべく知らない土地へ行ったり、新しい分野に挑戦してみたり。ああ、やっぱり1日24時間じゃ足りなさそうです。

幸せの黄色い「インコ」

佐藤 早苗(JIC 東京)

小鳥が好きで、子供の頃は文鳥のヒナを何羽か飼って手乗りにして遊んでいた。

大人になってからは飼うこともなかったが、娘が小学4年の頃、突然「セキセイインコを飼いたい」と言い出した。それまで文鳥以外の鳥は飼ったことがなかったが、いざ飼い始めると一気にその愛らしさに虜になってしまった。

まず何と言っても人懐こい。ケージを開けた途端外に飛びだし、頭の上や肩に乗ってくる。台所で水を使い始めるとその音を聞きつけ、すぐに飛んできて指に止まり水浴びを始める。新聞を読んでいると傍に寄ってきて、新聞紙の端っこをちぎって(食べて)遊ぶ。

そんなインコと戯れる時間が至福の時だった。しかし一昨年の夏、突然別れは来てしまった。

それから約1年後の去年7月、いつものように帰宅し、マンションの郵便ボックスに行くと、普段その時間にはいない管理人が声を掛けてきた。

「お家でインコを飼ってませんでしたか？」

話を聞くと迷子のインコをマンションの住人が保護し、預っているとのこと。

見せてもらおうと、小さな黄色いインコが段ボール箱の中でブルブルと震えていた。その姿を見てビックリ。目にしたインコは、次に私が飼いたいと思っていたインコそのものだったのだ。「運命的な出会い」を感じた私は、もし飼い主が見つからなかったら引取りたいと申し出た。その後、貼り紙やツイッター、掲示板で飼い主を探したが、見つけるまでには至らなかった。



晴れて我が家の一員になったインコに私は「ピーニャ」と名付けた(ロシア語っぽい響きだが、実はスペイン語で「パイナップル」の意味)。ピーニャは迷い鳥のせいか、どうもなかなか人に馴れない。休みの日はケージから出して遊ぶようにしているが、すぐに自分から中に入ってしまう。だが確実に変化はみられる。今では私の手から肩に飛び移るようになった。

2017年の私のささやかな夢は、ピーニャと自由自在に遊べるようになることだ。

あの至福の時をもう一度味わえますように。

奇しくも今年も酉年。年賀状にはもちろんピーニャが写っている。

夢は夢のような味

百瀬 智佳子(JIC 東京)

新年おめでとうございます。昨年も皆様の素敵な旅に関わらせていただけて嬉しかったです！今年もどうぞよろしくお願ひ致します。

私にとって今年こそ手に入れたい夢、憧れ・・・それは柔らかくも味の濃い栗の渋皮煮です。実はこのところ秋ごとに作ってみては、毎度意気消沈しております。

柔らかくするには重曹を使うと良いのですが、栗の味にも影響します。ただ茹でたのに比べて、同じ栗でも重曹を入れて茹でると不思議な薄味に。渋皮煮もぜひ重曹なしで作

ってみたい！と先人の皆様のレシピ(サイト検索などで)を試したところ、栗の味は残るもののなんとなく固くなってしまいました。柔らかさは渋皮煮が持つトキメキの大重要ポイントです。急冷しない、糖度を段階的に高める、など模索しましたが、繰り返し茹でては渋を取っていく作業はまる一晩～数日を要するため、季節限定ということもありなかなか経験を積みません。

作りたい味のイメージ(栗の味がしっかりしてねっとり柔らかい)はあるのですが・・・。重曹つまり炭酸水素ナトリウムは化学の力です。いくら丹念に煮たところで化学が起こすドラマチックな変化は質が異なり実現出来ないのかもしれないかもしれません。次回は一切重曹を使わないという姿勢にこだわらず、少ない量を試すなどで栗の味と柔らかさの妥協点を試行錯誤してみたいと思っています。

夢と言いつつ妥協も折り込み済みですが、とにかく、まずは自己満足を目指して。失敗ごとに胸の奥にためて来たりベンジへの情熱を、次の秋こそはめらめらと壮大に燃え上がせるつもりです。がんがん剥きます、栗！



アヤしい自家製瓶詰めたち

カメラを買いました。

竹村 貢 (JIC 東京)

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。

一昨年に子供の運動会のために一眼デジタルカメラを買いました。以前のカメラはコンパクトカメラで、もう8年以上も使っていました。28mm単焦点広角レンズのカメラで、ズームができない不便さがあったのです。

ある日、「息子の運動会が近いから新しいカメラが欲しいね」と妻に言われ、どれくらい予算がかかるのか、

早速ヨドバシカメラに行って調べました。「運動会はズームがついていた方がいいよ」「そうだねえ」ということで、早速一眼デジタルカメラ



のコーナーに向かいました。「ちょっといいカメラだと20万ぐらいするよ」って話をすると、「えっ、そんな高いの買うの?」と、やや険悪。私がいいと思った機種について、店員さんに聞いてみると、発売して少ししか経っていないので、一昔前に出た上位機種よりも機能が多くお勧めで、今日決めてくれたらサービスしてくれるとのこと。妻も納得して、その場で決めてしまいました。

新しく買った一眼は人の肌もきれいに撮れ、いい感じにボカしたり、ズームもできたり、また、WI-FIを通じて写真データが送れたり、スマートフォンでアプリをダウンロードすると、遠隔でシャッターが押せたり出来ます。実際、便利な機能が付いていても使いこなせていませんが……。カメラの機能に感心します。

カメラを買って、説明書を一通り読んで、気分が向いたときには景色なんかを撮ったりするのですが、後で確認してみると何か物足りなかったり、楽しい写真にならないので落ち込みます。

今年は、写真の本をしっかり読んで撮り方の勉強し、実践を重ねて、上手く撮れるようになれたらと思っています。

島デビューと山へ Come back!!

キャンプ年間50泊

白井 真理奈(JIC 東京)

私はいつも沢山の夢を抱えている。

子供達が大きくなったら〇〇に乗って〇〇に行って、〇〇を見たり〇〇をしったりしたいな……。なーんて。いわゆる「世の中のお母さんの些細な願望」だ(笑)。

アウトドアが大好きな両親の元で育っている我が家の双子は、もちろん外遊びが大好きだ。2週に1度はキャンプや山歩きに出かけていたら、朝から晩まで外で過ごしても疲れないほど、大人顔負けの体力がついてきた。さすが男の子だ。雪が降ればソリ遊び、夏になれば川遊び、秋には真っ

青に澄んだ空のもとで山を歩き、夜には空を見上げて星を見る。湖畔でキャンプをすれば夜暗くなるまでキックバイクでオフロード走行。天気や季節を問わず、外遊びを楽しんできた昨年の我が家のキャンプ実績は年間43泊。一昨年はたったの9泊だったから、外で遊ぶことの楽しさが子供達の体にも大分染みついただろう。その証拠にキャンプから帰る車中では、間髪入れずに「次のキャンプはいつ?」と聞いてくる。親にとっても子供達にとっても、やはり外遊びは楽しみ以外の何者でもない。



そんな我が家の(いや、私の?)今年の夢は島デビュー!!

目標は沖縄でのキャンプだが、まずは予行練習で近場の伊豆諸島にでも行ってみよう。また、昨年実績を踏まえ、キャンプ年間50泊。それと、子供達が生まれる前まで夫婦でずっとやっていた登山の復活。今年は子供達も連れて山へ戻りたい。たとえば、立山黒部アルペンルートで色々な乗り物を楽しみ、お気に入りの雷鳥沢でキャンプをする。要は、「山でのテント泊」だ。車に積んでなんでも持って行くことのできる快適なオートキャンプではなく、必要最低限の装備だけをザックに詰めて山に登る山岳キャンプ。そこにはまた違った楽しさや感動、不便だからこそ味わえる大きな喜びや発見がある。自然を敬い、自然に感謝し、自然の中で思いっきり遊ぶこと……

心が豊になるような、そんなキャンプを子供達に教えたい。



『夢は伝授され…、

願いは繰り返されて…』

白井 秀治 (JIC 東京)

皆様、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞ JIC をよろしくお願い致します。

今年の挨拶は「夢」をテーマに！という指令が発せられまして、悩みに悩んだ結果、辿りついたのは...やはり私は親ばか...3歳半になった我が子へ夢を託します。

去年の我が家のアウトドアライフは数えて合計キャンプ42泊となりました。

一昨年は「きゃんぷう。テントン」と言葉がまだまだはっきりしておりませんでした、去年の夏前には「パパあ、キャンプ



いつ行くの？早くテントで寝たいなあ〜」、「僕ね、〇〇キャンプ場が好きなんだあ〜」「キャンプ場で自転車乗るんだあ〜」と完全に覚醒しております。

我が家の双子ちゃまはまだまだ小さいのでスキーやテントを背負っての登山は無理があると勝手に判断しておりますが、キャンプや低山登山、キックバイクやソリ遊びなどはかなり高度に習得しております。アウトドア英才教育というつもりはありませんが、親としては非常に頼もしい限りです。

さて、自分が父親になって想起するのは...私が小学生だったころ、月に一度登山にでかけ、春と秋にキャンプを一回、夏には海とテントを担いで山へ、冬はスキーと父親に連れて行ってもらっていたことです(私も割とアウトドア英才教育だったのかしら?)。

今思い出されるのは、父親と並んでスキー場のリフトに乗っていた時、雪の結晶がスキーウェアに降ってきたこと。そして父親が「お父さんは同じ形の雪の結晶を見たことがないんだ」とリフト上で雪の結晶を一緒に凝視したこと。山スキーで雪原にテントを張り「月光浴」をしたり、キャンプサイトから夜空を見上げて、ベテルギウスの赤やシリウスの青を父親が話してくれたことです。

子供の時のインパクトは忘れることができません。

そして、小学生の時、「八ヶ岳に一人で登る！」「残雪の白馬岳にお父さんと登る！」と夢見ていました(この夢が実現したのは高校生になってからでしたが...)

私の父親も同じことを思っていたのかもしれませんが、私に教えてくれたことをそっくりそのまま我が子に伝授し、私と一緒に経験したことの一つでも良いから、彼らが大人になって誰かに伝えてもらえれば...これは私の夢。いや、「願い」ですかね。

Куплю машину

поближе к светофору

チステリーナ・イリーナ (JIC モスクワ)

世界中でモスクワの交通渋滞が一番凄まじいかも知れません。2013年にモスクワは世界で最も渋滞がひどい都市のトップに入っていました。特に年末年始は交通量がピークになります。10年ぐらい前、ロシア人は顔を合わせれば、「誰の罰ですか?」、「どうしたらいいんでしょう?」と言いあっていました。最近では「皆、どこに行くのですか?」という新しい質問が追加されました。お笑い番組には交通渋滞についての冗談がよく出てきます。

そういう冗談の一つがこの記事の見出しです。「Куплю машину поближе к светофору」、直訳すると、「信号の近くにある車を買う」。つまり、「信号の近くにある車を買ったら、早めに帰れるかもしれない」という意味です。

モスクワ市長にソビャニン氏が就任した後、渋滞との戦いが始まり、モスクワの交通状況は少しずつ改善に向かっています。



数年前にモスクワで交通調査が行われました。朝方(7時から9時半まで)と夕方(18時から〜)、車の台数が大幅に増えるので、地下鉄などの公共交通機関を利用するほうが良いことが明らかになりました。この2年間に7つの新しい地下鉄駅がオープンし、2016年9月にはモスクワ中央環状線が開通しました。最近、公共交通での移動がかなり便利になりました。モスクワの中心部では歩行者天国が拡大したので、車道が減り歩道が増えています。中心部に駐車場はあまりないので要注意です。

今年、モスクワは歩行者のためにも、車を持っている人のためにも使いやすくなる夢があります。日本でも、年末年始やお盆、ゴールデンウィークの時、帰省や行楽の車で渋滞が大変だと思います。

2017年、皆様は渋滞に巻き込まれることなく、家族や友達とより多くの時間を過ごせますように！ 新年あけましておめでとうございます。

インペリアル・ポーセレン

山下 篤美(サントペテルブルグ)

4年前にサントペテルブルグに引っ越してきたとき、それまで住んでいた極東ロシアと違って、当地を代表する磁器「インペリアル・ポーセレン」(<http://www.ipm.ru>)のショップが町のあちこちにあるのに驚くとともに、この磁器が興味の対象となった。

しかし、インペリアル・ポーセレンは、その名が示す通り1744年エリザヴェータ女帝の命により開かれた磁器工房。天才的な職人であったヴィノグラードフの高い調合技術により美しい製品を作り出すことができるようになると、華やかな贈り物文化を担う役割を負った。革命後は、庶民のものになったわけだが、それでも今なお普段使いの食器とは一線を画す気品を備えているような気がする。

在留邦人の間では、今やインペリアルの顔とも言える「コ



バルトネットシリーズ」やロシアらしいモチーフでもある「バレエシリーズ」が人気だ。しかし、これとて普段はガラスの棚にしまわれていて、ハレの日に食卓を彩るのにこそふさわしいものであり、我が家のテーブルにはちょっと「高嶺の花」と感じてきた。

そんなインペリアル・ポーセレンだったが、先日現地邦人の女性の会で、この工場を見学できる機会に恵まれた(写真① 住所 пр.Обуховской Обораны 151)。敷地内には、工場以外にショップや博物館、絵付け体験ができるマスタークラス用の部屋も併設されている。

まずはガイドからインペリアルの歴史概要の説明を受ける。そのあと、実際に豚の置物が作られる工程を見せてもらう。



モチーフを粘土で作り、それを元に石膏で象る。石膏で作られた型に、磁器の液体を型の表面に沿って流し込んでいく。豚くらいの大きさなら、2分で石膏に水分が吸い取られて、豚ができあがる(写真②、③)。ものによっては、い

くつかのパーツをそれぞれの型で成形し、つなぎ合わせるらしい。そして、これを1回目900度、2回目420度で焼成していく。絵を描いてから釉薬をかける場合は、1400度まで温度を上げて焼くそうだ。窯(写真④)は、現在ガスと電気を燃料として使っている。窯の大きさにも大中小があって、作品によって使い分けられている。作品作りの工程はそれぞれの専門家が分業しているため、窯の温度管理も経験を積んだ専門職のものが担当しているとのこと。

磁器に描かれている絵柄は、作家のオリジナルのものもあるし、昔ながらの復刻版もある。ちょうど復刻版を再現しているアトリエが垣間見られたが(写真⑤)、まるで絵画の模写のようで、素人目にもインペリアルの芸術性の高さが見て取れた。

このあと、皆でわいわいと絵付けを体験。翌日にはその作品を焼き上げてもらった。

今回の工場訪問を通じて、近くにはあるけど、近寄り難かったインペリアル・ポーセレンに少しだけだが、触れられたような気がする。ディナーセットはまだ遠い夢ではあるけれど、でも、いつかこれを揃えた豪華な食事会をやろう・・・と、ペテルブルグ生活に新たな楽しい野望を抱きながら、雪の舞う工場を後にした。

*なお工場見学の詳細はサイト内の案内をご参照ください。

大阪にもどりたい！

岡本 健裕(JIC 東京)

2017年の夢、それは大阪勤務に戻ることです。お願いします。大阪には仕事がないからだめという声も聞こえますが、今、仕事がないところに新しいものを作っておこなうのでしょうか。

東京にはだいたい危機が最後にやってきます。新しいものはたいてい軌道に乗ってから取り入れます。それでよいのです。それでこそ最高の効率で富が集積するのですから、東京はこれからもこうあるべきです。でも、こういう都市は前例のないことを試行錯誤するにはコストが高すぎる場所なのです。不毛の土地を開墾している暇があったら、目の前にたくさんある仕事を次々に処理した方が絶対に賢い。

そう、東京には手堅い仕事があります。たくさんありますが、しかしどれもいつかはなくなります。必ず、なくなってしまうのです。

私はこれまで、この新年の挨拶に近未来の見通しを確信的に混ぜて書いてきました。でも去年は、本当に予想外だ



ったことがあります。それは米国の大統領選挙でも英国のEU離脱でもなくて、ポケモンGOの出現です。人間の移動を不要にしてきた技術が、ある日突然、あれほど鮮やかに新しい動機で外出をする群衆を作り出して見せると

は思いませんでした。そして嬉しくなったのです。技術の進歩の先にも、「人間の移動」が肯定されているとわかったからです。それどころか、これから旅する人は一見何にもないところへ向かう。夢も希望もちゃんとあったのです。

例年自由に書いていたこの挨拶に、今年は社長から珍しく「2017年の夢」というテーマが課されました。ならば私がこう主張することも想定内だったはず。私たちは地球を自在に移動するお客様と仕事をしているのですから、どうか社内の異動くらいためらわないでください。

わがまを言う以上、給料は減っても構いません。どうか減らしてください(法に触れぬ程度に、笑)。

明日にも路頭に迷う、という危機感が私にはちょうどいいのです。



左から2番目 K.シェスタコフ観光部長

ロシア極東地域・観光調査団に同行してきました

杉浦 信也(JIC 東京)

昨年5月ロシア・ソチで安倍首相からプーチン大統領に提案された日ロの経済分野8項目の協力プランの一つである「人的交流の抜本的拡大」。その実現のために、観光庁が事業主体となり JATA(日本旅行業協会)のメンバーが中心となって実施された「ロシア極東地域調査団」に同行して参りました。

渡航先は11月初旬のハバロフスクとウラジオストクで、調査団は JTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行といった大手旅行会社にロシア方面専門の旅行社が数社加わった構成メンバーでした。

今回の参加者の中でもロシア極東地域への訪問は初めてという人が多く、ウラジオストクやハバロフスクが日本から航空機で2時間半から3時間という近距離に位置していることをあらためて実感していました。

旅行を職業としているメンバーにしてこの状態なので、あらためて広くこの至近性を認知してもらうことが、ロシア極東方面への旅行・人的交流を拡大していく第一歩だと感じました。



新しいロゴマーク

帰国後に行われたロシア観光促進ワーキンググループでは、さっそく極東地域への旅行商品に「一番近いヨーロッパ」というロゴを使用し広めていくことが決定されました。

12月のプーチン大統領来日に合わせて、外務省よりロシア国民に対する日本査証の発給条件緩和策(短期数次ビザの5年への延長、観光用の数次ビザ3年の発給、自己支弁の渡航の場合の身元保証書の免除など)が発表されました。期待されたロシア・韓国間で行われている短期査証の相互免除まではいっきに実現されることはありませんでしたが、査証の障壁が取り払われる一歩手前まで来ていると言えそうです。

今回訪問の際に会った沿海州政府シェスタコフ観光部長からも、今年7月1日よりウラジオストク入国時に発給されるアライバル・ビザの実施が報告されました(※日本出発前にオンラインで事前申請をしておく必要があります)。アライバル・ビザの実施は2度の延期を経て3度目の正直となりますが、今年が日露間の人的交流の拡大に向けてはずみがつく1年となりますように!

また2018年を「ロシアにおける日本年」「日本におけるロシア年」とすることも日露間で合意されました。そのための様々な取り組みも始まる年となりそうです。